

<研究室活動報告>

大子町における活動報告

荒山未来*
伊藤純也**
稲葉大輝***
橋田慈子****

1. はじめに

本稿では、地域と教育研究会の大子町における活動の報告を①だいが小学校「学校紹介映像」の制作（第2節）、②夢道場（第3節）、③佐原地区産業文化祭（第4節）に分けて執筆する。筆者は地域と教育研究会に所属している者で、第2節を荒山と橋田、第3節を伊藤、第4節を稲葉が執筆した。

2. だいが小学校「学校紹介映像」の制作

2-1. 活動概要

2017年2月2日、16日、17日の3日間にわたり、だいが小学校と筑波大学地域と教育研究会が連携して、小学校の「学校紹介映像」の制作が行われた。この企画で筆者ら（学類生4名、大学院生4名）は、だいが小学校の4年生とともに校歌に合わせた映像の制作に取り組んだ。

大子町立だいが小学校は、大子町の中心部の高台に位置し、樹齢500年と推定される大けやきに見守られ、敷地内には昔の郷校「文武館」が残る歴史と伝統ある学校である。平成13年4月1日に、町内5校が統合し、「だいが小学校」となり、平成22年4月1日には下野宮小学校を統合した。けやきにちなみ「つよく 大きく たくましく」を学校教育目標にかかげ、児童一人一人の生きる力を育てている¹。

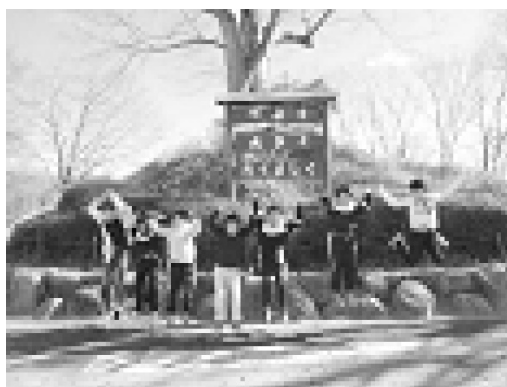


図1 「学校紹介映像」撮影の様子

2-2. 「学校紹介映像」の制作

*筑波大学人間学群教育学類3年

**筑波大学人間学群教育学類3年

***筑波大学人間学群教育学類3年

****筑波大学人間総合科学研究科教育基礎学専攻1年

「学校紹介映像」の制作では、校歌の歌詞に合わせた映像の制作を行った。このプロジェクトは来年度から高学年になる4年生が高学年としての自覚を持つこと、大子町とだいが小学校の魅力について考えること、の2つを目的に行われた。子どもたちは、1組、2組それぞれ4班ずつに分かれ、校歌の1番から4番までを担当した。1班に2人ずつ学生が入り、それぞれの班の映像制作の撮影や編集の手伝いを行った。1日目は、各クラス2時間ずつ授業をし、プロジェクトの説明と、自分たちの班の映像に必要な素材の検討を行った。さらに、インターネットで探す、校庭で撮影するなどして素材を収集した。その素材を用いて、子どもたちの要望に合わせて学生が映像を編集した。2日目は、各クラス1時間ずつ授業を行った。学生が制作した映像を、班ごとに子どもたちと鑑賞した。より良い映像にするにはどのように修正すべきかを子どもたちと話し合い、さらに素材集めをした。その後子どもたちが集めた素材をもとに、学生がさらに映像を修正した。3日目は、2クラス合同で2時間にわたって全体上映会を行った。全体上映会では、はじめに子どもたちが映像制作で頑張ったところを発表し、1、2組全体で完成した「学校紹介映像」を鑑賞した。子どもたちが制作した「学校紹介映像」はだいが小学校のホームページに掲載されており、誰でも閲覧することが可能である。

(荒山未来)



図2 だいが小学校「学校紹介」

2-3. 考察

大子町での活動に参加して早7年が経つが、今回取り組んだだいが小学校での映像制作は、地域と教育研究会でも初めての試みであった。企画段階から上映に至るまで、だいが小学校の先生方と研究会のメンバーがともに授業計画を練り、試行錯誤していった経験は、今までにないものであり、ともすれば、「お客さん」と化してしまう大学生や大学院生にとって、アクティブ・ラーニングの場になっていたと考えている。いかに子どもたちから面白い発想を引き出すことができるのか、大学生や大学院生の立場だからこそ、引き出せるものがあるのではないかと、そう考えながら、取り組んでいったように思う。

今回、幸いにも、だいが小学校の教員の先生方から「学校紹介映像」の制作に関する感想をいただくことができたので、少しご紹介させていただきつつ、考察を加えたい。先生方からいただいた感想は、大まかに、①学生との交流経験の意味、②映像メディアをつくる経験の意味についての記述に分けることが出来る。

① 学生との交流経験の意味

まず、だいが小学校の子どもたちにとっての「学生と交流することの意味」については、以下のような記述が寄せられた。

「(だいが小学校の一引用者) 子どもたちにとって外部の若い方と接する機会は新鮮であり、貴重なことだと思います。家庭と学校以外に大人と接することがない子どもも多々いるので、大学生とふれあうことで、楽しく活動するだけでなく、年上の人に対する言葉遣いや礼儀なども学んでくれることを期待しています」(元担任・伊藤教諭)

町内に高等教育機関のない大子町では、若年層人口が高年齢層に比べると著しく少ない。そうした環境で育った児童にとって、自分の親や担任の先生以外の「大人と接する」ということには、日頃会得することが難しい「年上の人に対する言葉遣いや礼儀」を学ぶ、インフォーマルな学びも期待されている。インフォーマルな学びとしては、「自由な発想」を「積極的に出し合う」という学生ならではの物事の考え方や姿勢について学ぶことも期待されていたと思われる。

「大学生がすべてのグループの中に入り(中略)、児童の自由な発想を具現化したりしてくれたことで、児童は自由に映像制作に取り組むことができました」(教務主任・寺門教諭)

「大学生にアドバイスをもらいながら友達と話し合う活動を通して、子どもならではのアイデアを積極的に出し合うことができた」(元担任・大森教諭)

大学生や大学院生が学校に入ることには、子どもから「自由な発想」や「子どもならではのアイデア」を引き出していくという意味もあると考えられる。

② 映像メディアをつくる経験の意味

続いて、児童にとって「映像メディアを作る経験」は、いかなる意味を持つのかを見ていきたい。まず言及されているのが、一人一人の「得意分野」を活かすことのできる映像制作の意味である。

「映像作りは勉強が嫌いでも、運動が苦手でも、自分の得意分野で活躍することができます。児童は映像制作の取組を通して自分の居場所を見つけていたようにも見えました」「そのように成長し変化を遂げる子どもたちの姿を見つめるうちに、私たち大人(教

員一引用者) もまた、変化したようにも感じています」(教務主任・寺門教諭)

映像制作という営みには、どのような映像を作ることが正しいのかという答えがない。さらに、児童たちは「自分の得意分野」でディレクターやカメラマン、演者などとして参加すれば良いので、映像づくりのなかで自分に合った役割を選択することができる。そうした営みを通して、児童たちは「自分の居場所を見つけ」「変化」していったと寺門教諭は語る。さらに、そうした様子を見るなかで、教員にも、児童を見る視点が変わるなどの変化があったと考えられる。このように、映像制作という営みは児童自身の変化を引き起こし、教員による児童の見方の変化を生み出している可能性があると思われる。この点については、元担任の大森教諭も「それぞれの児童の個性が生かされた役割分担が自然に作られ」、普段は「おとなしい児童の集まり」のなかから「リーダーシップをとる児童が現れ」るなど、普段とは違った一面が見え始めていたことに言及している。

今回の映像制作では、校歌の内容を映像として表現していく活動が行われてきたが、日頃、校歌の意味やその内容について、深く考えてこなかった児童にとっては、今回の取組が「校歌を身近に感じる」きっかけになり、校歌を「しっかり歌うことのできる児童が増えた」という意見も見られた。

「映像作成を通して(校歌の一引用者)歌詞の意味を自分たちで考えながら表現していくことによって(中略)今まで以上に校歌を身近に感じる事が出来たと思います」「映像作成後には(中略 校歌を一引用者)しっかり歌うことのできる児童が増えました」(元担任・伊藤教諭)

校歌という、昔から歌われている音楽を、身近なものとして捉え表現していく作業は、児童にとって、しばしば取っつきにくさもあったかもしれないが、そうしたなかでも子どもたちの「自由な発想」「アイデア」をくみ取りつつ、なるべく表現活動のなかに反映させていくとする学生や教員の先生方の創意工夫があったからこそ、それぞれの「個性が生かされた」作品に仕上がったのだと思う。今後も、日常に何気なく存在しているものを自分の言葉でかみ砕きながら表現していく——そのような映像制作の取組が続き、多くの子どもの「個性」が輝いていくことを期待している。

〔謝辞〕本稿を執筆するにあたり、だいが小学校の寺門教諭、伊藤教諭と、大子町教育委員会の清水教諭、大森教諭に大変お世話になりました。誠にありがとうございました。

(橋田慈子)

2-4. 感想

続いて、参加した学生の感想を掲載する。

この映像制作の中で重要だったのは、一度自分たちの集めた素材で作られた映像を見て、修正する機会があったことだろう。映像制作をしたことのない子どもたちは、自分たちの集めた素材が最終的にどのような映像になるのかイメージが湧いていなかった。はじめは制作に乗り気でない子もおり、ただ歌詞に忠実に写真を探すだけの作業になってしまっていた。しかし、自分たちの集めた素材で作られた映像を見ることで、完成のイメージが湧くと同時に、どうすればもっと良い映像になるか、多くのアイデアが出るようになっていた。歌詞を人文字で表したり、黒板やカーテンなど教室の中でも使える道具を見出したりしていた。子どもたちにとって写真を探すだけだった活動が、一人一人がこだわりをもった写真や映像を生み出していく活動へと変わっていった。この活動を通して子どもたちが、思考力や表現力を実践的に身につけていく様子を見て取れた。また、1、2組全体で上映会を行ったあと、「映像が面白かった」、という感想だけでなく、「別のクラスのこんな表現の仕方がすごかった」、といった表現の仕方に着目した感想がいくつも見られた。子どもたちは自分たちで映像を作っていく過程で、作品を作るために必要な力だけでなく、新たな視点から作品を見る力も身につけることが出来たのだろう。

「学校紹介映像」を、校長先生をはじめ様々な先生方に見ていただき、評価していただいたことで、自分たちがしてきたことが認められ、子どもたちにとって大きな自信につながったろう。筆者自身、柔軟な発想力から生み出される多くのアイデアと、笑顔で、楽しそうに撮影に走り回る子どもたちから、多くのものを得ることが出来た。短い間ながら、子どもたちと打ち解け、成長していく姿を間近で感じることができ、とても有意義な時間であった。

(荒山未来)

3. 「夢道場」

3-1. 活動概要

「夢道場」は、さはら小学校で毎年行われている、自家製野菜販売の取り組みである。児童を中心として育てた野菜を、佐原地区産業文化祭や道の駅で販売している。この活動は高学年の児童を中心として、主に子どもたちの手で栽培や収穫、そして販売まで行っているという点に特徴がある。2017年7月22日に行われた活動では、道の駅での販売のお手伝いという形で、われわれ地域と教育研究会のメンバーも参加させていただいた。

販売当日の朝に小学校へ到着すると、さっそく校庭の端にある畑へと案内していただいた。小学校の校庭にあるとは思えないほどの立派な畑であり、様々な種類の野菜が栽培されていた。高学年の児童を中心にそれぞれが担当する野菜を収穫していき、選別や袋詰め、値段の書かれたシールを貼る作業などを行った。学生もそれぞれの作業を手伝ったが、その際にはさはら小の児童たちと積極的にコミュニケーションをとるようにした。

2時間ほどでこれらの作業を終え、袋詰めした野菜を車に乗せ道の駅へと移動した。道の駅に着いた後は割り当てられたスペースに野菜を並べ、手作りの看板を設置した。販売が始まると児童たちは元気な声で呼び込みを行った。会計作業は先生方や高学年の児童が担当していたので筑波大生一行は呼び込みを手伝ったが、児童たちのエネルギーに終始圧倒されていた。元気な呼び込みの甲斐もあって、わずか1時間程度で野菜を完売することができた。



図3 道の駅での活動の様子

3-2. 感想・考察

夢道場での取り組みを通して、児童たちのエネルギーに驚かされたというのが筆者の率直な感想である。また先生方が特に指示を行わなくとも上級生を中心として児童たちが協力しながら手際よく作業を行っていた。毎年の経験が生かされているのだと感じる。また実際の販売活動でのお手伝いを通して、地域の方々が児童たちに温かい声をかけている姿が印象的であった。何年も続けている活動であり、ホームページでの発信も行っているということで地域での地名度も高いのであろう²

夢道場の活動の特徴としては、さはら小の児童で構成されている「さはらファミリー会社」と呼ばれる組織を作り、それぞれが社員として役割を分担し協力しながら働くというものがあるが、これが非常によく機能していた。ファミリー会社には社長や販売部長などの役職が存在し、上級生を中心としたチームで活動することで、希薄になりがちな縦のつながりを作るとともに、責任をもって各自の仕事に取り組むようになると考えられる。比較対象が筆者の通っていた小学校になってしまうが、実際にさはら小学校の児童たちは他学年間の仲が良く、積極的にコミュニケーションを取りながら協力して一つの作業を行うという社会的活動を高いクオリティで行っていると感じた。これには夢道場の継続した活動経験が大きな影響を与えていると考えられる。

夢道場の活動はさはら小学校だけで完結するものではなく、地域の人との交流を深める貴重な機会になる素晴らしい活動内容であったため、ぜひ今後の活動も注視していきたい。ただ、野菜を買いに来てくれた方との交流は多く行われていたが、隣のスペースで野菜販売を行っていた地域の方々との交流がなかったことが少し残念に感じられた。野菜の栽培から販売までの一連の過程で、経験豊富な地域の方々から学ぶべきことは多くあると考える。筆者は今回初めてさはら小学校にお邪魔させていただいたため、まだまだ理解が浅いところが多くあったと思われる。継続的に夢道場に参加することで活動への理解を深めるとともに、さはら小

学校の児童や先生方、地域の方との交流も深めていきたい。

(伊藤純也)

4. 佐原地区産業文化祭³

4-1. 活動概要

2017年11月5日、第33回佐原地区産業文化祭が開催された。地域における産業・文化の振興を目的としたこのお祭りでは、さはら小学校の児童・教員・保護者らによる自家製野菜販売活動「夢道場」や地域の人々による「手打ちそば」のお店などが出店しており、賑わいを見せている。前年に引続き、筆者ら（学類生5名、大学院生5名、教員1名）は産業文化祭当日の手伝いを通じて、地域の人々との交流を図り、地域振興に対する理解を深めた。

4-2. 佐原地区の産業と文化について

佐原地区産業文化祭では、佐原地区の人々が中心となって出店を構えるほか、近隣で収穫された農作物の品評会が行われている。また、佐原地区の元教員による歌謡ショーや子どもたちによるソーラン節、皆が一緒になって踊る地域土着の「茶の里音頭」といった催しが行われている。会場は、大子町立さはら小学校に程近い、奥久慈茶の里公園であった。当日は暖かい陽気に包まれ、地域の人々は穏やかな表情で互いにゆったりとした時間を過ごしているようであった。



図4 佐原地区産業文化祭の様子

筆者らは現代的でとても綺麗な造りの「さはら小学校」に到着した後、会場の茶の里公園に向かった。佐原地区は周囲を山々に囲まれ、少し急で坂の多い地域であったが、茶の里公園は平らで緑の芝がすくすくと育つサッカー場2つ分ぐらいの広さの公園であった。筆者らは正午過ぎに会場に到着したが、その時にはすでに200人近くの人々で賑わっており、鮎の塩焼きの芳しい香りや、名物「太子おやき」の醤油の香ばしい香りが周囲を包みこんでいた。そして、学生は2～3名程に分かれ、「夢道場」や「ハッスルママの会」、「手打ちそば」といった出店の手伝いに取り掛かった。学生の中には中国からの留学生もおり、始めは不安な様子であったが、地域の人々の優しく暖かい雰囲気に接する中ですぐに打ち解けているようであった。その後は、出店の手伝いをしながら、子どもたちによるソーラン節や、「茶の里音頭」といった催しを楽しみ、地域の人々と祭りの運営の手伝いをしながら交流を図った。

4-3. 佐原地区産業文化祭における「夢道場」の取り組み

佐原地区産業文化祭の中で、前節で取り上げられた「夢道場」の手伝いをさせて頂いた筆者は、上級生が出す指示を聞きながらテキパキと動く下級生の姿を見て、圧倒されてしまった。販売所の準備が終わった後、3・4年生が店の周りで呼び込みを行うことになったが、ついつい友人と遊んでしまう様子を見て上級生が叱りに行く様子が見られた。

4-4. 「ハッスルママの会」

「ハッスルママの会」は佐原地区の元気なお母さんによって組織された会である。当日は唐揚げや豚汁、飲み物などを出店で販売しており、お母さん方は中国からの留学生に優しく手伝いの仕方を教えてくれていた。出店で販売の際は単に商品の受け渡しをするだけでなく、いくつかの言葉が交わされており、祭りを通して地域の交流が生まれている場面が見られた。

4-5. 「手打ちそば」

今回の祭りの一角には、とても盛況な「手打ちそば」を販売している出店があった。そばは「奥久慈そば」として全国の職人からも一目置かれる奥久慈の名産品の一つであり、佐原地区の産業としても代表的なものである。当日出店していた方にお話を伺うと、普段からそば職人としてお店を出しているのではなく、他の仕事をしながら、祭りの際にこのような手打ちそばのお店を出しているそうである。



図5 手打ちそばの出店

4-6. 「大子おやき」

大子町には、廃校となった旧榎野地小学校の校舎を利用したおやきの工場がある。廃校を利用したおやき製造販売を行っている「大子おやき学校」では、実際におやき作りを体験することもできる。当日は、きんぴらやカボチャといった大子町で収穫される作物を包んで作られたおやきや、チーズ味や野沢菜味も販売しており、地域の味を楽しむことができた。

「おやき」は古い時代から大子町の農家などで作られた伝統的な郷土食であるが、近年の食生活の変化に伴い食べられることが少なくなってきていた。このような状況に対し、素晴らしいおやきの味を再現し、大子の自然環境を生かして現代風にアレンジしたものが「大子おやき」である。（大子おやきについての具体的な活動は章末の URL を参照されたい。）

4-7. 感想と考察

佐原地区を含む茨城県大子町周辺の奥久慈と呼ばれる地域は、緑の山々と透き通った湧水から流れる奥久慈川に代表される自然に恵まれ、古くから色々な種の第一次産業を行う地域であった。その後、産業の発展をもとに人々が集まり集住する中で、豊かな奥久慈の産業・文化で栄えていた。

その中でも、有名なものが奥久慈茶である。奥久慈は日本で茶を栽培することができる北限であり、新潟の村上茶と並び有名な茶産業である。奥久慈茶は、かつて大子町を含む周辺地域が「保内」と呼ばれていたことから、「保内郷茶」とも呼ばれており、それだけの古い歴史が存在する。機械が用いられていなかった時代、茶の栽培には多くの人手が必要とされたため、自然と茶の栽培をする場所には多くの人が集



図6 品評会中の重量当て大会の様子

まることになった。茶の栽培には多くの工程が必要となるが、その中でも代表的なものが「茶摘み」であろう。ひとつ一つの茶の葉をもいで収穫する茶摘みはとても過酷な作業であったと推察される。現在も、奥久慈では手もみ茶を扱っており、まさに佐原地区産業文化祭の会場となった「茶の里公園」では手もみ茶体験をはじめ、奥久慈茶の味、そして歴史に触れる機会が創出されている。このような背景の中で、佐原地区産業文化祭は奥久慈茶といった地域産業・文化を現代に伝える茶の里公園という場で行われているのである。

ここで、今回考察したい事項は、近年日本各地での祭りの規模の収縮が起きていることにより、地域の産業や文化を伝達する機能が弱まってしまっているという問題である。確かに、日本を代表するような京都の祇園祭や青森のねぶた祭、北海道の雪まつりなどは多くの観光客を招くイベントとして開催されており、祭りの文化が継承されているように思える。

しかし、その一方で地域の祭りというものは祭りを運営する担い手不足などの影響により縮小される傾向にあるのである。運営する担い手不足の背景としては、地域に関わる住民の減少が挙げられる。自治会の所属率や青年会の活動縮小などはその実態を色濃く反映するものである。ただし、重要なのは単に人数が不足していることだけではなく、前提として地域に関わる理由が希薄になってしまっているということである。かつて佐原地区、奥久慈地域に多くの人が集まっていた理由を、大規模に人手を必要とする、茶をはじめとした産業の効果によるものと考えれば、近代以降の分業化や個別化の産業の在り方では、産業を媒介とした地域との関係者を増やすことは難しい。逆に言えば、産業や地域と関わる仕事を増やすことが地域に関わる人口を増やし、地域を維持・発展することに繋がるのではないだろうか。もしくは、

産業だけでなく、新たな形で地域に関わる人材を増やすことが必要ではないだろうか。

これを踏まえ、振り返ってみると、佐原地区産業文化祭の中で出店されていた「手打そば」「大子おやき学校」の取り組みは地域と関わる産業の在り方と言える。「手打ちそば」の出店は、普段からそれを生業とする人々によるものではないが、祭りという場を通して地域と関わる一つの仕事を作りだしていると言える。「大子おやき学校」においては、廃校を利用し、地域の農産物を活かした特産品を作りだそうとしている点で、特産品を軸に地域と関わる産業を生み出そうとする取り組みであると言える。さらに、このような「仕事として地域に関わる人を増やす取り組み」だけでなく、佐原地区産業文化祭の中では「夢道場」という、新たに地域と関わる取り組みが伺えた。「夢道場」は、さはら小学校という地域の子どもたちが集まる場を軸にして、地域の産業に触れ、地域の人々と関わっていかうとする取り組みである。地域の農作物を作る際には、周辺の土地に詳しく、その土地を活かした農業を知っている地域の専門家が不可欠であろう。「夢道場」では、子どもが地域についての理解を深められる専門家と出会うことができる。ここで得られる知識や技術は地域における「ローカルな知」である。地域農業の中にある地域の土壌、土地の在り方を小さいころから体験し、触れることで、その場所を「自分の地域」として認識し、また帰ってきたい場所としてその地域を認識するようになるのではないだろうか。

以上のように、地域と関わる産業、仕事を作りだしていく営みの中で地域に人が集まっていくことを考えたが、それらの産業、仕事を一つの場としてつないでいく点で祭りという営みは必要不可欠なものであり、祭りを通して人や産業が繋がっていく在り方を残していく必要があるのではないだろうか。次の世代が社会を担っていくためにも、祭りのような行事を通して地域と関わる経験が重要なのである。

4-8. おわりに

今回の調査を行うことで、筆者自身が新たな地域と関わる経験をすることができた。祭りの手伝いをする経験は筆者にとっても初めてであったが、単なるお客さん、観光客ではなく、共に地域と関わる人という立場で接することができたと思う。祭りは人同士の繋がりの中で作られていくものだが、依然としてある地域の人々との繋がりを維持するだけでなく、新たな繋がりを生む場としても大切であると考えた。

佐原地区産業文化祭中、以前、地域と教育研究会に参加していた先輩に出会った。その方は大子町の地域出身の方であり、この周辺地域を行政の立場から盛り上げる活動をしているそうである。この方のお話を伺う中で、佐原地区産業文化祭をはじめとする大子町のフィールドワークは、学問の世界だけに閉じこもるのではなく、現実の社会を理解する機会を与えてくれているのだと感じた。これからも、このような場を通じて地域の人々との交流をしつつ、学問を深めていきたいと考えた。

〔謝辞〕今回お世話になった、先生方、佐原地区の方々に、このような機会を設けていただいたことに感謝いたします。

(稲葉大輝)

¹大子町立だいが小学校『学校紹介』<http://www.daigo.ed.jp/daigo-syo/syokai/> (2018年3月26日最終閲覧)

²大子町立さはら小学校『常陸大黒豆日記』<http://www.daigo.ed.jp/sahara-syo/%E5%A4%A2%E9%81%93%E5%A0%B4%EF%BC%88%E5%B8%B8%E9%99%B8%E5%A4%A7%E9%BB%92%E8%B1%86%E6%97%A5%E8%A8%98%EF%BC%89-1/> (2018年3月26日最終閲覧)

³大子町観光協会『大子を味わう-大子町特産品』http://www.daigo-kanko.jp/?page_id=4704 (2018年3月26日最終閲覧)